

大田区教育委員会教育長様

大田区立多摩川小学校
校長 福 地 伸

令和 7 年度 多摩川小学校 学校経営計画

1 教育目標

東京都並びに大田区教育委員会の教育目標を踏まえ、人間尊重の精神に基づき、自主性と創造性に富み、生涯にわたる学習の基礎を培う教育を目指して、以下のような児童を育成するため、教育目標を設定する。（○は、今年度の重点項目）

- ◎ 正しく ○自分の考えをもち、表現できるこども ・ 創意工夫して、解決に努めるこども
- ◎ やさしく ○相手の立場に立って、考えることができるこども ・ 互いに助け合い、豊かな心をもつこども
- ◎ 強く ○最後までやりとげる意志の強いこども ・ 健康づくりに取り組むこども

2 目指す学校像 新「おおた教育ビジョン」5か年計画（令和6～10年度）の2年目

力のある学校

～ “笑顔” で光り輝く

ウェルビーイングな学校づくり ～

開校70年目の令和7年度、今までの歴史と伝統を受け継ぎながら、新しい学習内容や方法を取り入れ、自分が生まれ育った矢口地域を知り、地域を愛し、地域を笑顔にするこどもを育てる。家庭と学校、さらに地域が一体となり、夢と希望をもって、未来あるこどもたちを育てていく。

【今年度を目指すことを加味した 本校の現状と課題】

《現状》

新型コロナウイルス感染症が5類に移行（令和5年5月）して2年が経つ。現在は、様々な学校行事や交流活動を実施し、学習・生活両面において活気が戻っている。体育科の校内研究（R3～5の3年間）では、「人とのかかわりを重視した学習」を推進し、指導力の向上に努めた。教師は自身の専門教科・分野を学級・専科経営の中心に据え、良好な人間関係を育む一助とした。昨年度（R6）は新教科「おおたの未来づくり」の研究実践校として各学年で矢口地域の学習に取り組み、低学年から「ものづくり」と「地域創生」を意識した教育活動を実践した。新教科の研究を継続するなかで、さらに多摩川河川敷を含めた地域を意識し、本校の特色を活かした実践を重ねる。学校評価は、各種数値目標で毎年上昇もしくは横這いの結果を出し、「保護者アンケート」でも全21項目中19項目で85%以上の肯定的な評価を得た。

一方、別室登校や不登校の児童数は横這い傾向である。教職員の配置を工夫し、個別最適な学びを推進し対応していく。今後、これらの現状を全教職員で共有し、令和6年度に改訂された新「おおた教育ビジョン」を確実に推進していく。

◇学習について

本校は各種調査において学力的には決して高い水準ではないが、保護者からは「意欲的な学習、基礎的な学力の定着」等の項目で92%以上の肯定的評価（以下、A評価）を得ている。児童調査では学習面で高数値を出し読書活動も向上している。今後、さらに「友達とのかかわり」を重視し、学校内外で主体的に学習に取り組む状況を持続・向上させていく。

◇生活について

保護者アンケート「こどもは先生に話を聞いてもらう、相談している」等のA評価が83%と低かった。児童同士や担任一児童の心の繋がりは学級経営に大きく影響する。今年度は特に「互いに認め合い 励まし合い 高め合う」環境となるような「こころの教育」に力を入れ、自他の良いところや励ましの声かけなどの向上を目指す。

◇情操について

本校では12年前から担任一児童の個別面談を年3回以上実施している。また、「学年・学校担任」という意識で全教職員が連携して児童を観ている。今後も経営の柱としていく。

H27より特別支援教室（SR）が設置され、矢口小・矢口西小を巡回する拠点校となった。特別な支援を要する児童は多く、特別支援校内委員会を毎月開催し、適切な支援を行っていく。

《課題》

(1) 予測困難な未来社会を創造的に生きる力 基本的な学習習慣と基礎学力の定着から…

- ・ 「区学習効果測定」の結果から、児童の学力は上昇傾向にある。しかし、基礎学力の定着には大きな差が見られる。毎時間、達成感や成就感を味わわせ、自己有用感を高める授業、「わかった 分かった 解った」が実感できる授業を目指す。そのためには教員一人一人の指導力・授業力の向上は必須である。教員相互に見合い、指導力・授業力を高めていく。
- ・ 「おおたの未来づくり」の研究実践として、低・中・高と系統的に「地域を知り、地域を愛し、地域に貢献する児童」を育成する。低・中学年ではその素地を培うための学習を工夫する。高学年では特に発信力を強化し、「自分の考えをもち、それをまとめて他者に発信する」ことができる児童を育てる。C S・学校支援本部と連携し、様々な角度から検証する。
- ・ 教育の目的は“自立”＝一人前のおとなに育てることである。本校では、あゆみとキャリアパスポートを連動させ、児童の目標設定と振り返りを重視、自己評価できる児童を育成する。更に、様々な選択肢からより良いものを選択する（選択できる）こどもを育てる。
- ・ S T E A M教育は、これからの社会を生き抜くこどもたちにとって大きな財産になる。I C T機器を活用したプログラミング教育の推進、論理的・科学的な思考力の向上を図る。

(2) 健やかなところとからだ、生活するための基本的な力 児童の健全育成を目指す

- ・ 姿勢と好奇心を重視 ～ できる・できないではなく、する・しない、したい・したくないを自分で決めさせる。やりなさいではなく、自分のために・自分の将来のために、へと導く。
- ・ 健全なところは、健全なからだに宿る ～ 本校では過去3年、体育科を軸に校内研究を進め、全ての教育活動で対話的な学習、豊かな関係づくりを目指した。この方向性を継続する。
- ・ コロナ後の体力回復と向上対策は不可欠である。各種取組に加え、たまサポやPによるスポーツテスト補助などの機会を有効に活用し、今まで以上に児童の健全育成を推進する。
- ・ 全児童、一人一人の長所や課題を的確に捉え、創意工夫した指導をすることは全教員の責務である。全児童に対し「特別支援教育」の理念や指導法を生かし、学習・生活における児童の課題を改善していく。S R拠点校として校内に専門的な教員がいる強みを生かすと共に、特別支援コーディネーター・S C・担任等が連携し、個に応じた指導の工夫と改善を図る。
- ・ 読書は豊かなところを育てる ～ 児童の読書意欲は向上している。引き続き、各担任と「司書教諭」「読書学習司書」が連携し、「学習関連図書を活用」や「校内読書週間（年3回）」、「読み聞かせ（水曜日）」等を含めた読書活動を充実させ、さらなる読書意欲の向上を図る。
- ・ 日頃から家庭と連携して生活習慣や学習習慣の改善と向上を図る。課題が生じた時は、児童および保護者の話を客観的に捉え、問題点を的確に判断し、解決策を見出す。

(3) 地域を知り、地域を愛し、地域を笑顔にする力 ウェルビーイングな学校・地域を…

- ・ 校長として「笑顔の学校づくり」6年目を迎える。「いつでも・どこでも・だれにでも」が定着するよう、一人一人が何をすべきか考えて行動するよう声がけを継続する。そのための基礎となる「挨拶」「時間やルール、マナー」「当番・係活動」の日常的な実践を促進する。
- ・ 高め合う集団・良好な人間関係を築く ～ “仲良くなければ学級が成り立たない”話し合いを重視し、協力や助け合いをする環境をつくる。そのために、日常から学年・学校担任として全教職員が一人一人の児童にかかわる。質の高い会話を使うことができる集団を育てる。
- ・ 校内や放課後等の生活で、学校・地域社会の一員として責任をもって行動できるようにする。保護者・地域の皆様に支えられていることを実感できるよう、低学年からの地域学習を強化し、地域を知り、地域を愛し、地域を笑顔にする（貢献する）児童の育成を目指す。
- ・ 学年で連携し「特別の教科 道徳」指導の更なる充実を目指す。物事を多面的・多角的に考え自己の生き方についての考えを深められるように工夫、「こころの教育」の充実に努める。
- ・ P T Aは協力的である。今後も教育活動を積極的に公開し学校・保護者・地域の連携を深める。
- ・ たまサポ（学校支援地域本部）を中心に、学校の教育活動や独自の支援活動の体制が整っている。たまパパ（おやじの会）は12年目になる。連携を更に深め、支援体制の充実を図る。

- ・ R 6 年 1 月に地域運営学校(C S)になり 2 年目、今まで以上に地域の声を教育活動に生かすと共に、本校への理解を深めていく。熟議や学校評価を行い、教育活動を更に充実させる。
 - ・ 70 周年 (10/18) に向け、P T A や自治会長を中心とする実行委員会で協議検討する。
- (4) その他 新しい課題・予測困難な時代へ対応する力
- ・ 当たり前のことが当たり前でなくなる時代、「自分の当たり前」を見直す。アンコンシャスバイアス（無意識の思い込み・偏見）を全教職員が意識して指導する。
 - ・ 講師、支援員、補助員を効果的・計画的に配置し、学習指導の充実を目指すと共に、教職員のワークライフバランスに対する意識向上と、仕事の実質的な変革・軽減を図る。
 - ・ 「教師の仕事は何か？」を常に意識し、今後の学校組織の活性化を図る。

【目指す学校像に迫るための方針とキーワード】

(1) 変化に主体的に対応し、未来を創る児童を育てる学校づくり

交流活動の活発化 → 学習指導要領「こども主体の学校づくり」を推進する。

○発達段階に合わせた「コミュニケーション能力」の育成（あらゆる場面で）

○問題を自力で解決する学習や体験による、「論理的・科学的な思考力」の育成

○I C T 機器を有効に活用できる「情報活用能力」の育成（タブレットの活用）

○地域を知り、地域を愛し、地域に貢献する子の育成 → 児童の健全育成へ

(2) 自己表現・自己評価 → 自分の考えを表現できる児童を育てる、目標設定と振り返りを重視

児童の学びのために教師の授業力を高める。ねらいをもった授業、楽しく、よくわかる授業を行う。「わかった！ 分かった！ 解った！」とこどもたちが言う授業を目指す。

○おおたの未来づくりの充実 ○あゆみ&キャリアパスポートの連動 ○教育環境の充実

(3) 他者理解＝優しさは想像力→互いに助け合い、豊かなところをもつ児童を育てる環境づくり

すべての教育活動で関わりを大切にしていく。教師とこどもの関わりは特に重要と考える。自分の居場所があり、互いに認め合い、励まし合い、高め合う関係・環境をつくる。

○仲良く助け合うこども ○話を聞いてくれる先生 ○多摩川小の子はみんなの子

(4) 最後までやり抜く強い意志と 健康づくりに取り組む児童を育てる日常づくり

体力の向上を目指し、遊びと運動の好きな児童を育てる。給食の時間を中心に食育にも取り組んでいく。健康で安全な生活を送れるよう日常的に指導する。→ 健全育成を目指す

○体力向上「一学級一実践」 ○未来づくり・食育の推進 ○早寝・早起き・朝ごはん

(5) 保護者・地域と協力・連携し、教育の成果を高める学校づくり

保護者・地域と共に、地域の特色を生かしてこどもたちを育てる「共育」を推進する。

○保護者との連携 ○たまサポ・たまパパとの連携 ○学校運営協議会(C S)との連携

《キーワード》

○ 自立 ～ 自己評価できる児童（キャリアパスポートを重視） → 一人前のおとなに育てる

○ 選択 ～ 正解は一つではない 「様々な選択肢からより良いものを…」 「失敗は成功のもと」

○ 姿勢と好奇心

～ できる・できないではなく、する・しない、したい・したくない を自分で決める

～ やりなさいではなく、自分のために・自分の将来のために

○ 学年・学校担任 高め合う集団 良好な人間関係

～ 一人一人のこどもに全教職員がかかわる こどもも おとなも 良好な関係を築く

～ 仲良くなければ学級が成り立たない 協力や助け合いは不可欠 話し合いを大切に

○ 質の高い会話（高学年）← エネルギーの高い言葉（中学年）← ふわふわことば（低学年）

～ 「ありがとう」を多く言えば言うほど、「ストレス」が少なくなる

3 目指す学校像に迫るための方策 ※おおた教育ビジョン5年計画の2年目

新「おおた教育ビジョン」と本校の目指す教育の実現に向けて次の5点を年度末に振り返る。

(1) 授業改善を推進する。さらに、授業力に留まらず日常における指導力の向上を目指す。

○「教育は人なり」プロの教師としての自覚をもつ教師を育成する。

- ・教師は授業で勝負する ～ 質の高い授業を創造していく。
- ・一人一人のこどもに確かな学力を付ける教育を推進する。
- ・授業実践を中心に、教員の学習指導力を高め、児童が主体的で協働的な学び合いを通して、深い学びを実感できる授業を提供する。

○ 指導力≒授業力の認識 学習指導だけでなく、様々な場面に対応できる教員を育成する。

- ・校内OJTとして生活・学習の両面から指導技術を共有し、指導の工夫改善に努める。
- ・教師一人一人の自己の強みを確立させ、専門性の高い教師を育成する。

○ 保護者・地域、そして何よりこども（たち）から信頼される教師を育成する。

- ・日頃からコミュニケーションを大切にする。何があってもぶれない関係を築く。
- ・体罰禁止、個人情報保護など、服務事故防止を徹底する。

(2) 自己を理解し他者を思いやる、互いに助け合い豊かなところをもつ児童を育成する。

○ 児童が落ち着いて生活できる学校、安心して学べる学校をつくる。

○「多摩川小の子は みんなの子」という考えに立ち、全教職員で児童理解と指導に努める。

- ・道徳教育・人権教育を、日常的に、さらに重点期間を設定し、充実させる。
- ・一人一人の児童の個性を伸長する学級（専科・サポートルーム）経営を実践する。
- ・いじめ、不登校ゼロを目指し、相談体制（全員面談やカウンセリング）を強化する。

(3) 体力の向上、健康の維持・増進を図る。最後までやり抜く児童を育成する。

○ すべての児童の体力向上に向けて、体育部を中心に学校全体で組織的に取り組む。

- ・「一校一取組」および「一学級一実践」で、児童の体力の向上や達成感がはっきりと結果として表れるようにする。→ 運動の日常化を図る（授業だけでなく休み時間や放課後、休日も）

○ 日頃から「早寝・早起き・朝ごはん」を実践し、正しい生活習慣・生活リズムを身に付ける。

○「おおたの未来づくり」に「食育」を含め、食でも「笑顔あふれる日常」をイメージさせる。

- ・各学級で給食指導を中心に、食育に取り組む。食育から健康を意識することをも育てる。

(4) 学校・家庭・地域が一体となった「共育」を推進する。

○ 地域運営学校＝地域と共にある学校として、より一層学校を開き、保護者や地域の方々と協働する機会を設け、学校と家庭、地域が一体になった学校づくりを進める。

- ・PTAや学校支援地域本部（たまサポ）、おやじの会（たまパパ）、学校運営協議会を中心に、保護者や地域の声を積極的に取り入れ、保護者や地域との連携を一層図っていく。

○「おおたの未来づくり」の研究実践校として、各学年が地域コーディネーターと連携し、特色ある教育活動を推進すると共に、PTA・地域・ボランティアの方々との連携を深める。

○ 様々な学校行事を保護者や地域に公開し、活動の意図や意義を共有、協力・支援の体制を築く。

- ・あらゆる教育活動について、学校便り・HP・メール等の各種通信を通じて、積極的に保護者や地域に発信し、学校の教育活動にかかわりや関心が低い皆様にも情報を提供する。

(5) 保幼小連携および小中連携の推進

○ 低学年から基本的な生活習慣を身に付けさせ、児童の自己肯定感や自己有用感を高める。

- ・就学前の幼稚園や保育園に対し、交流活動や各種通信を公開し、本校の教育活動を広める。
- ・コロナ禍で途絶えていた交流活動を再開し、「小一プロブレム」の減少に努める。
- ・入学と同時に円滑な小学校生活が送れるよう、「スタートカリキュラム」を実践・改善する。

○ 矢口中学校・矢口西小学校との連携を密にし、9年間を見通した教育を推進する。

- ・小中連携教育を推進し、「中一ギャップ」を起こさないための引継等を的確に行う。

4 本年度の取組目標と具体的な方策

(1) 教育活動の目標と方策

① 予測困難な未来社会を創造的に生きる力を育成するために 確実な授業実践から

- ・ 学習指導要領に則った指導を、全教員が実践する。
- ・ 年間指導計画、週案等により、意図的・計画的に授業を行うと共に、常に授業改善に取り組む。
- ・ 毎時間のねらいを明確にし、児童が達成感を味わえる授業を行う。
- ・ 読書や漢字・計算などの基礎的・基本的な学習の定着に取り組む。
- ・ 全教育活動やOJTを通じ教員の指導技術を高め、組織的に児童の健全育成を図る。
- ・ 学年や学校全体に、教師一人一人が授業を積極的に公開し、互いを高め合う。
- ・ 問題解決学習を推進し、主体的・協働的に学ぶ意欲や達成感を高める。
- ・ 外国語活動・外国語、特別の教科 道徳、総合的な学習等の確実な実践を行う。
- ・ おおたの未来づくりの研究実践を全教員で協働し、試行錯誤しながら実践を深める。
- ・ 自己申告に基づき、教師が今年度の目標を明確にもち、自己のキャリア向上に努める。
- ・ 授業の開始と終了の時刻を守り、学習規律（発表の仕方など）を徹底する。（「時を守る」）
- ・ 少人数指導や日本語指導、講師、学習支援員、学校図書館司書等を活用した指導により、個に応じた指導の充実を図る。
- ・ 副校長アシスタントを活用し、副校長による人材育成を充実させる。教員支援員も活用する。
- ・ 校内OJTとして、ベテランや中堅の教員から若手の教員に対し、日常的に業務内容や指導技術を伝承し、教師の資質能力向上に努める。
- ・ 区教研や都研修センター主催の研修、その他の研修会に積極的に参加する。
- ・ 自ら参加した研究会の情報は、OJTとして研修を実施し校内の教職員に還元する。
- ・ 体罰禁止等、服務事故の防止を徹底する。そのための研修や調査を的確に実施する。

② 健やかなこころとからだをつくり、生活するための基本的な力 児童の健全育成のために

- ・ 基本的な生活習慣、学校のきまり、マナーを定着させる指導を行う。
- ・ 「多摩川小のあいいうえお（あいさつ、いのち、うんどう、えがお、おもいやり）」を、全教職員で共通に声掛けし、児童の自己肯定感を高める取組を日々徹底する。
- ・ あいさつ、正しい言葉遣い、基本的な生活習慣は、教師が率先して垂範する。（「礼を正す」）
- ・ 休み時間など、すき間時間の児童の安全管理に努め、問題を未然に防止する。
- ・ 「ふわふわ言葉」と「ちくちく言葉」を理解させ、言葉には影響力があることを指導する。
- ・ たてわり班活動や副籍交流活動を進め、豊かなかかわりの中で思いやりの心を育む。
- ・ 人権尊重教育を徹底し、互いを尊重し、思いやる人間関係に立脚した経営を行う。
- ・ いじめ防止対策基本方針に基づき、いじめは決してしてはいけないことを徹底する。
- ・ 特別支援教育を推進し、教師の児童理解力を高め、サポートルーム（特別支援教室）を含めた教師間の情報交換を密にすると共に、報告・連絡・相談を徹底する。
- ・ 年2回の「こどもを語る会」や「生活指導の会」等で、課題のある児童について全教職員で共通理解し、その対応や課題の生じた学級への協力体制を組織的に構築する。
- ・ 体験活動を通して、社会性を身に付けると共に、自然への感謝や畏怖の心を育み、働くことの意味や社会貢献の大切さを知らせる。
- ・ 不登校対策・問題行動対策を組織的に行う。（SCやSSW、支援員を活用する）
- ・ 保護者や関係諸機関（巡回相談、民生児童委員、子ども家庭支援センター、児童相談所等）との連絡を密にし、児童一人一人の状況把握に努め、児童虐待やいじめ・不登校を予防する。
- ・ すすんで運動に親しむ児童の育成を全教員で取り組む。
- ・ 体育授業の授業改善に取り組み、運動量を確保し体力向上を図る。
- ・ なわとび、走り方教室、持久走などを通して、継続して運動に取り組ませる。
- ・ 体力テストの結果を分析し、マネジメントする。体力向上の方策を立て実行する。

- ・ 「一校一取組」および「一学級一実践」で体力向上や達成感が結果として表れるようにする。
 - ・ 「早寝・早起き・朝ごはん」の実践と正しい生活習慣を身に付ける。
 - ・ 各学級で給食指導を中心に、食育に取り組む。「日本の善き食文化」を継承する。
 - ・ 体育学習だけでなく、休み時間や放課後、休日にも遊びや運動に取り組む児童を育成する。
- ③ 地域を知り、地域を愛し、地域を笑顔にする力 ウェルビーイングな学校・地域を目指すために
- ・ 学校支援地域本部（たまサポ）のコーディネーターを中心に、地域の教育力を積極的に学校教育に取り入れる。
 - ・ 特色ある教育活動である、多摩川の自然環境を生かした教育活動を推進する。
 - ・ 読み聞かせ会の方々など、教育支援ボランティアの力を教育活動に生かす。
 - ・ 区や地域主催の行事に、こどもを積極的に参加させ、地域の一員としての自覚を促す。
 - ・ 学校・学年便り・学級便り等の各種通信、メール・HP等で本校の教育活動を発信すると共に、保護者や地域の声を積極的に取り入れ、連携を一層図っていく。
 - ・ 学校公開、授業参観、保護者会、道徳授業地区公開講座、運動会、体育健康教育授業、学習発表会などの諸行事を通じて保護者や地域の方々に教育活動を理解していただくよう努める。
 - ・ 外部評価（アンケート、外部評価など）を教育活動に生かす。
 - ・ 災害発生時に適切な行動がとれるよう、防災教育を進めると共に、地域と連携して対応できる体制を構築する。

④ 保幼小連携および小中連携

- ・ 近隣の保育園・幼稚園との交流する中で、進学・進級の喜びを具体的に味わう。
- ・ 新入生に対し、入学後の学校生活が円滑に始められるように「スタートカリキュラム」を実践し、小一プロブレムが起こらないようなきめの細かい指導を行う。
- ・ 学習や生活上の課題について話し合い、9年間の教育課程を見据えた連携を行う。
- ・ 小学校児童と中学校生徒が交流する場面を設定し、中学進学への見通しをもたせる。
- ・ 中学校教員の出張授業や小中教員の実技研修などを通して、教員間の連携を深める。

(2) 今年度の数値目標（昨年度の「保護者アンケート」「全校児童アンケート」より）

昨年度、全21項目中19項目で肯定率85%を超えた。※（ ）の数値はR6年度の結果
今年度は、肯定的評価が低かった①～⑤の項目（88%以下）と全校児童アンケートの3項目（○印の76%以下）について特に意識して指導する。保護者向けの全項目で90%超を目指す。

- ① ご家庭は、学校やPTAの行事に積極的に参加しているか。 (79%)
→ 70周年を機に保護者の来校機会を増やし、学校への帰属意識・参加意識を高める。
 - ② 先生に話を聞いてもらったり相談したりしている。 (83%)
→ ②④については、日常の会話や声がけでこどもとの良好な人間関係を築き、更に、毎学期の個人面談、休み時間や放課後の個への声がけなど生活指導の充実を図る。
 - ③ お子さんは、挨拶や返事、言葉遣いなどの基本的な生活習慣が身に付いている。 (85%)
→ 日頃から教員が率先して美しい言葉を使い、生活習慣は全校一丸となり向上を目指す。
 - ④ 学校は、子どもの話をよく聞き、対応している。 (87%)
 - ⑤ こどもは、社会のマナーやルールを守って生活している。 (88%)
→ 地域での学習を多く設定し、地域の一員として貢献できるこどもを育成する。
- 進んで読書に取り組んでいる。 (児童アンケート：57%)
→ 日々の読書習慣や読み聞かせ、月間の充実等、良い文章や書物に触れる機会を増やす。
- 学校の勉強や生活で、自分のよいところを出すことができる。 (児童アンケート：74%)
→ 学校生活全般で児童一人一人が活躍する場面を増やし、自己有用感の向上を図る。
- 学校や家庭で言われなくても宿題に取り組んでいる。 (児童アンケート：76%)
→ 教育の目的は「自立」である。常に自ら進んで取り組むことができる方策を講じる。